

この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

●はずれた予想

「一瞬の永遠」、これはある写真家から聞いた言葉です。シャッターチャンスを生（いのち）として写真家ならではの表現かと思えます。写真家のような繊細さや厳密さは別としても、それぞれに「一瞬の永遠」はあるのではないのでしょうか。人生の折々で、忘れることのできない一枚の写真のようなシーンがあるはずで。

私にも、「一瞬の永遠」はいろいろとあります。追々紹介していこうと思いますが、連載の冒頭で一つだけ紹介しておきたいことが

あります。それは、1977年8月の共同作業所全国連絡会（今は「きょうされん」と呼称）の結成の集いの光景です。その誕生の秘話や背景についてはいずれかの号で詳しく述べることにしますが、ここで触れておきたいのは、結成の集いの様子ではなく、その場で脳裏に浮かんだことです。

熱っぽく飛び交う参加者の発言に耳を傾けながら、「無認可作業所は一体いくつまで伸びるのだろう。今の約100カ所からいざれば1000カ所を超えるのでは。政府が障害の重い人の労働の課題にまともに向き合うまでにどれくらいかかるのか。10年間、それとも15年間……」などの思いが重なりました。あ

のときの光景と脳裏に浮かんだことは、今も艶やかに残っています。

あれから40年近くになりますが、当時の予想は見事にはずれませんでした。無認可作業所の数は文字通りの急増を続け、ピーク時には6000カ所を超えました。すべての都道府県で無認可作業所への補助金制度がつけられるなど、社会的にも認知されるようになりました。しかし肝心の労働の課題への政府の向き合い方は、さっぱりです。労働政策からの支援は皆無のまま、現在の就労継続支援事業B型（かつての授産施設）での営みは、正確に言えば「権利としての労働」ではなく「あいまいな労働」のままです。それを反映するか

のように、日本独特の「福祉的就労」という奇妙な概念が定着しています。障害のない大人であればなんなく適用されるいくつもの労働法規が、B型事業所の利用者にとっては超えることのできないハードルになっているのです。

障害のある人のなかには、家族のなかには、そして支援に携わっている人のなかには、やはり将来予想がはずれた人がたくさんいるのではないのでしょうか。この30年来、障害分野での中心的なスローガンの一つとなっている「地域生活」「自立生活」の例をあげればわかりやすいと思います。

スローガン自体は多くの障害のある人のニーズに叶い、理念的にもまちがっていません。ただし、その前提はきちんとした公的な支援の裏打ちであり、そこに期待を込めての地域生活志向であったはずで、現実はどうでしょう。あまりにも低い所得状況と、頼れるのは家族だけというのが一般的で、言い換えれば本人の耐乏と家族の負担という二つの「含み資産」でどうにか成り立っているのです。

ここでも「権利としての地域生活」からはほど遠く、多くは「名ばかり地域生活」と言っていないのではないのでしょうか。

●ゆがめられてきた 障害のある人への支援策

こうした実態は、障害のある人をめぐるあらゆる分野で、また子どもから大人までのす



第1回 なお続く “この国に生まれた不幸”

藤井克徳

日本障害者協議会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり / 1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害者フォーラム（JDF）や、日本障害者協議会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。

べての年代に当てはまるように思います。関連する法律や制度について、部分的または外見上はそこそこに見えるかもしれませんが、最大の問題点は障害のある人に対する国の大元の考え方です。大元の考え方のことを、本質と言ってもいいでしょう。それは必ずやそのときどきの政策に反映されます。

障害のある人に対する政策の本質は、「自助努力」「受益者負担」「自己責任」などに置き換えられながら、社会保障制度の全体的な後退と相まって1990年代の半ば過ぎから大きく変わり始めました。そして、2005年に成立したあの障害者自立支援法で最高潮を迎えることになりました。

その後、自立支援法は全国の71人の原告による「違憲訴訟」によって、廃止の方向が示されました。これに伴い、先にあげた政策の本質はいったんは薄まることになりました。しかし、昨今の多数与党の後押しもあって、元の流れに戻り、その勢いは以前より強まりつつあるのが現状です。

私たちは、障害のある人の支援は国と自治体を中心とする公的な責任で進められるべきと考えます。この考え方は特殊ではなく、世界の障害関連政策をリードしてきた北部・中部ヨーロッパ諸国で一貫して大切にされています。日本においても、先輩たちが第二次世界大戦後、地道に積み上げてきた考え方で、

なお、「自助」や「自己責任」について一言触れておきます。障害のある人とその家族は、誰に言われるまでもなく毎日が自助の連続です。障害の自己責任についても同様で、



▲きょうされん第38回全国大会inひょうご (2015)